

# せたかむい

古平町役場総務課  
電話42・2181  
平成21年3月1日

## 年表で読む 古平の歴史

135

### ◇ラムシャ申し渡し

安政二年（一八五五）、古平場所は一時幕府直轄となったことがある。その時の申し渡しが高札に書いて出された。

一、公儀（幕府）の言うことは重い。制札にあることや今までの決まりは固く守ること

一、日の丸や中黒の印をつけた船は勿論、難破船がある時は別に定めた通りとし、僅かな品物であっても隠したりする時は罰を申し付ける

一、火の元は大切に、入念に取り扱うこと

一、ご用状（手紙）の継ぎ立て

や役人が通行する時は、人足など勤めること

一、異国船や遭難船を見たときは、早速役人詰所へ届けること

一、贈り物は勿論、諸産物を一点でも船方その他と交易すれば厳しい罰を受ける

一、常に漁業に精を出し、食糧を貯え耕作など追々心がけること

一、親子兄弟、夫婦をはじめ、親類とも睦まじくするのは勿論、男女年頃になったら、役付きが世話をし、縁組をなすこと

一、喧嘩口論は勿論、言葉を慎み、違反した時は厳しい罰を受ける

一、勝手に外の場所へ行つてはならない。どうしても行かなければならない時には詰所へ願出て指図を受けること

一、運上屋支配人や番人にいたるまで親しくし、道理に合わないことがあつた時は早々に申し出ること

右の通り申し渡ししておくので、固く守ること

（江差町古文書から抜書きし、書き直したもの）

「ラムシャ」というのは、アイヌの人たちの久し振りのあいさつ「ウムシャ」から転じたものと言われ、御撫謝、御赦など漢字で書かれていたこともある。

松前藩時代、役人の巡視の際アイヌの敬意を表する贈り物の交換から、ご馳走を出してもてなしたのであるが、この行事のときに役人の権力を示し、服従を図る手段として、役付けの任命や、行いに対して賞を与えたりする外、掟書を読み聞かせたりしていたが、それが次第に仕事始めや仕事収めの手段として行なわれるようになり、古平の場所請負人であつた恵比須屋岡

田家でも、場所を種田家に引き継ぐまで行なわれていた。

### ◇古平アイヌの出稼ぎ

古平と苫小牧、室蘭方面との漁業については早くから交流があつたことが知られているが、安政三年（一八五六）、石狩川の鮭場に出稼ぎさせられている。石狩川下流の七場所が、アイヌの自主的な網引き場であり、地元アイヌ二〇〇人余りがこれに従事したため、他の場所では人手不足となり、余市、高島、沙流、勇払、忍路、古平、有珠などから一八〇余人を強制的に出稼ぎさせた。

しかし、その待遇は以前より少し改善されたとはいえず劣悪で、翌安政四年石狩を巡視した幕府の奉行が「アイヌの取り扱いはおつての外ひどく、場所第一である」と、厳しくとがめたほどであつた。

このことは、その年石狩場所に着任した奉行によって改革され、石狩場所は箱館奉行所直轄となり、出稼ぎアイヌ二〇余人に漁業が許可された。その後、

出稼ぎのアイヌの人たちはそこに住み着くようになり、古平のアイヌの減少したのもこれが原因とも考えられる。

## ◇アイヌの交易

古平では、はじめアイヌの人たちは河口付近に部落をつくって住み着き、鯉や鮭、熊などを獲って生活していたと思われるが、和人が来るようになってから嗜好品と収獲物の交易をするようになった。この交易の仕方は『蝦夷国私記』に述べられている。

「蝦夷地では、場所のある村に運上屋という家を造り、船がそこへ入ると交易品を残らず陸揚げし、米は蝦夷俵といつて八升ばかりを計つて小俵で渡す。煙草は南部野辺地という所から、大縄と言うのは長さ三間半ばかり、小縄と言うのは二間ぐらいに煙草の葉を二、三枚はさみ、これを縄の煙草と言つて吸うにはよい煙草である。酒は秋田の大山というところで造つていて、二斗樽というのには一斗四升ばかりが入っている。酒は毎年四

月頃に松前に積んで来るが、その酒を求めて多くの人が集まり、それを仕込んでそれぞれの場所へ運んで行くその酒は生酒と言つて色が赤く、それに水を加えて調合している。塩、小鍋、小刀、古着などはどの船も必ず仕入れをする品物である。通辞から村々の乙名へ連絡し、その場所場所所獲れた品々を持つて集まり、その品によつて米はどれだけ、煙草ならどれだけと、昔から相場が大体決まっている。お金は全く通用しなくて、小判を見せるとただ笑うばかりである。……」

とあり、その様子を察すること出来る。

古平場所での交易状況は、岡田家の古い文書(文政年間「一九〇年ほど前」)の中にも記されている。

### 蝦夷交易値段

鯉一束・数の子一樽 〓

米一升・清酒二盃・大豆五合

小豆五合・煙草一玉・鯖割き

二枚・きせる一本・皮針一本

かすがえ五枚・もみきり一丁

外割り八束 〓 もみきり一丁

同 十束 〓 斧一丁

同 二束 〓 鎌一丁

古着 上 〓 鯉二十四束

同 中 〓 同 十六束

同 下 〓 同 八束

手拭い・足袋 〓 同 二束

昆布(四貫五百) 〓 米一升

薪一式 〓 濁酒四升

毛皮、熊の胆、鷹の羽などは軽物と言つて、領主へ献上すると、藩では褒美として品物を与えた。

熊皮・熊の胆一頭分 〓 熊の胆の目方によつて米四斗四升から五斗六升まで

熊皮 一枚 〓 米一斗二升

獺(カワウソ) 皮一枚 〓 米四升

狐皮一枚 〓 玄米四升・白米二升

厚司(アツシ) 一枚 〓 米八升

※ 鯉一束、数の子一樽などの単位はよく分からない。米一斗と言つても、実際はこれより少ない量であった。

安政四年(一八六七) 四月、箱館奉行はクマの皮について次のような達しを出した。

その方どもがこの後、穴熊を獲つた時は、そのまま運上屋

へ持つてくること

一、今までより倍増の手当を遣わす上、遠方より持つて来た時は運賃を遣わす

一、山中で熊の肉を食用とし、皮や胆だけ持つて来た時は手当

でだけ支給する

支配人・番人・稼ぎ人共へ右の通り申し渡すので、その方共

も遺憾のないよう心がけ、年々熊皮、熊の胆共に多く出るように努めること。

## ◇アイヌ人口の推移

古平のアイヌの人たちは、古平川両岸地帯に多く住んでいたと言われているが、元禄一一年(一六九八)と安永九年(一七八〇)の猛烈に流行した痘瘡(ポウソウ)のために死亡した者が多かった。また、明治になり本州方面からの移住が急激に増加したため、生活の不安から転居したり、和人と婚姻したりして人口が急激に減少していった。引用する記録によつて多少の違いがあるが、古平における年代別のおおよその人口は記録にある。

(続く)

## 昭和四年 続

## ▼四月二三日 (雪)

起床五時、板戸を開ける。今日もダメ、各地はどこも大漁大漁と言っているのに古平はようやく七千余石、早一期も過ぎたのに実には気がもめる。今日も入舸は大漁・穴澗で一杓、幌武意方面も漁があつたとのこと。買い鯨をする人も多く、家でも買い鯨するつもりだったが、一〇時頃から雨にヤマセが吹き、時化模様になったので止めにした。本日は一本八円だったとのこと。幸治は明日小樽へ行くべく、それぞれ支度する。古平では随分買い鯨が盛んで、本日までで二千石余りになるだろう。夜は満天の星で静かなよい夜だ。鯨の大漁を祈る。

## ▼四月一四日 (曇天)

起床六時、曇天で割合寒い。鯨は今日もダメ。本当に心配なことだ、この分では終れば昨年との二の舞だ。どんなことになるか心細い話だ。幸治、明日から高商の始業につき、八時半の富丸で行った。

午後から雨が降り出した。熊さん〇から鯨一箱(約一五〇入り)一円五〇銭で買った由。果たしてもうけが出るや否や。古平鯨収獲調を見る。前浜歩方などは一杯ぐらいを上として以下半杯、四半杯などばかり、八例年は一カ統で千石も獲っていたのに、今年は三カ統で一五、六杯、こんなこともない。佐渡行きの背割り鯨、小包で六個

は大漁を期待して元氣は大したものであったが、漁期も早八分どおりも過ぎた。この分だと実に昨年昨年同様の不漁、従って一般への打撃も大きい。お寺に着いたのは三番目、読経後、和尚は旅行中なので吉原さんの部屋で話す。薄漁の心細い話しばかりだ。七時帰る、曇りの寒空だ。小雨が降る。カレ針やテグス買いの客が来る。

## 高野孝作さんの日記から

## 当時の世相を見る

144

もこしらえた。

## ▼四月一五日 (曇 寒空)

祝聖会の例会日、四時半に起床、早薄明るい。改良かまに火をいれ、洗面早々に出かける。まだ水で洗面するのは冷たい。町は鯨場中なので早く起きて人通りもある。昨夜も一向に漁は無いらしい、一日きびしくなった。今月初め頃

幸治は今日高商へ初登校だ。三カ年無事で目出度く卒業の日を楽しみにしている。

## ▼四月一六日 (快晴)

鯨漁皆無、第一期も終り、九分通り楽しみもない。町の人は皆困った困ったと言つて元気がない。本日に一年の大半を鯨で暮らす古平としては大打撃だ。われわれの

商売にも大影響だ。しかしこれも如何とも仕方ない。・も二カ統もやつてくん製鯨にするのさえないで、三杯も買う有様だ。今日は稀なる上天氣、雪の消えること、町中は川のようにだ。

## ▼四月一七日 (快晴)

起床六時、妻は五時頃起きて女中役、大勢の子供がいて女中がいなくなつたのでなかなか骨が折れる。一日中少しの暇もない。それでも八時過ぎにきかん坊が寢床に就けば少しは落ち着く。それでも久がまだ手がかかり、時々泣き出す。ほんとに二人分も働いている。起床早々、久が浜へ行きたいと言うのでおんぶして行く。ちやうど起し船が入つて来たところ、ほんの少し宛て獲れたとのこと。・でも五、六〇もつこ獲れ、まだ生きてピンピンした鯨が落ちる。それを拾う子供らが二、三〇人も後について歩く。これが大漁で何日も続くと、子供らの拾う鯨も大したもの。子供らもホマチ鯨ができて大喜びだろうが、この不漁では仕方ない。今日も暖かく雪は随分消えた。自転車に乗るにはまだ道路

が悪いようだ。カレ釣りが盛んになり道具が売れる。

#### ▼四月一八日 (快晴)

一日ごとに春らしくなった。しかし例年よりも雪が多いので、岩内、余市辺りの農家では、燕麦や野菜類の蒔き付けが一五、六日遅れたとのこと。店は鯨場がサツパリなので、カレ釣り用品が売れていくが、こんなものが売れても知れたものだ。町もだんだん春らしく、電気会社の連中はキャッチボールなどやっている。月給取りは気楽だ。江差では電灯料の値下げ問題の要求が入れられず、町民は電灯取り止めを申し込んだとのこと。実際、電灯会社の暴利はどこも甚だしいようだ。今日から店のコタツを止めた。

#### ▼四月一九日 (快晴)

今日も天気快晴、日魯会社で従来経営していた露領漁区七八カ統過般、宇多某に落札されたので、日魯会社をはじめ函館方面の関係者は大騒ぎだ。新日魯会社の名称の下に、二千万円の資本で新会社を経営すること、日魯会社

もこれには大慌てで、財界にも波紋を及ぼしている。大会社にはそれなりの競争があるもの、何の事業も安心は出来ぬものだ。幸治から手紙が来る。寄宿舎を止め、従来の松下寮から通うようになるだろうとのこと。その方がよいかも知れぬ。

#### ▼四月二十日 (快晴)

天気快晴、毎日毎日の天気で戸外の雪は随分消え、電気会社や・の前の道路はカラカラに乾いている、子供らがコマ回しなどをやっている。いよいよ鯨場も九分どおりあきらめ、浜も寂しくなった。今日は樺太行きの汽船二隻が入港して、出稼ぎの漁夫等が大勢行く。町は一日ごとに寂しくなるのだ。四、五年前までは二月末から五月中旬まで漁夫たちがいて、町も随分賑わっていたものだが、この頃は四月下旬には終るので、僅か二十日間ぐらいの鯨場になり寂しくなった。今日熊さん、坂下さんの船でカレ延縄に行く、午後四時頃帰って来たが、三人で一二、三もつこの大漁だった、一人四もつこずつになる。中にはカレの外にマ

ス、タコ、タラなどがあり、吉治、悦三、四郎らは坂下の浜までもつこしよいに行き、魚を貰って大喜びで帰って来る。

#### ▼四月二二日 (暴風雨)

春雨がシトシトと降り出す。床の中で雨の音を聞きつつ休んでいる気持ちもいいものだ。学校が休みなので家の中は賑やかだ。この頃、久のせわしくなったこと特別だ、這って歩くのもなかなか早くなった。妻の苦勞もひと通りではないが、一家団らん、コタツに入っても無邪気に遊んでいるのも可愛いものだ。午後からは雨も強く風もついて大時化になった。二階のガラス戸に当る雨風も激しい。夜になって暴風雨はますます激しくなり、火防組合や青年団など非常召集して夜警に出る。浜は大時化、今晩出漁したタラ釣り船でまだ帰港せぬものもあり、また帰港して停泊中の船も、大風波にて海岸に打ち上げられるなどで大騒ぎ。一時頃までに発動機船七、八隻が打ち上げられ、水難救済会是不眠不休で海岸を警戒している。実に大変な騒ぎだ。

#### ▼四月二三日 (暴風雨、吹雪)

昨日午後からの暴風雨は稀なる大時化となり、昨晩は水難救済会も活動していたが、今朝聞けば、第一銭丸(越中から来た帆船)の錨綱が切れ、〆種田の浜へ吹き寄せられ、海岸から三〇間ほどのところへ座礁したとて大騒ぎとのこと。吉治、早速見に行き帰る。私も九時頃行ったが、風雨に時折り雪が混じり、町中をようやく歩けるぐらいだ。浜へ行つて見れば船は大きな新しいよい船のようだ。米やムシロなど満載しているとのこと。幸い救済会の方で、本船から陸岸に太いロープを張っていて連絡がとれた。暴風雪の昨日から休まず船内で活動している船員は、実に強い元気なものだ。ロープにガンタ(滑車)を付けた籠を吊り、それを別なロープ引いて、本船から船員全員が陸に上がり救助された。ちょうど活動写真にありそうな場面。以前、明治四五年に出羽丸遭難当時の救助のことを思い出した。一〇時帰る、随分寒かった。浜田、吉井、八幡その他、発動機船一〇余隻難破したとのこと。吉

井へ見舞いに行き、昼食後、熊さんの家にも知らせに行ったら、何も知らずに居たとのこと。二時頃帰ったが、風雨はナカナカ止まず板戸を閉めている。昨年も二三日は大風波で被害があったのだ。夜、十店員が来て泊まる。茶の間でいろいろ話す。

#### ▼四月二三日 (雪後晴)

一昨日来の暴風大時化は実に大損害を与えた。鯉大不漁で困っている古早町に、一万数千円の損害、実に神様もひどい。今日は未明から浜に寄り木拾いやら、刺網の綱ダンブなど拾う人で大騒ぎ。この時化後、ひと漁あらんかと何れもカタの準備で忙しい。十社員昨晩泊り、今朝神村まで行く。ナギだんだんよろしい。正午には太陽もカンカン輝き暖かい天気になった。中庭の雪もあと一尺ほどになった。四、五日中には消えるだろう。松の囲いのサヤリを取ってやる。半年振りで暖かい太陽の光に浴して松も清々するだろう。今日の新聞に古早大時化、損害一万二千円くらいと出ている。夕方にいたりだんだんないできた。しかしまだ網

の建て込みはできない。浜にナマコやタコが上がったというので、子供らは大騒ぎ。妻は四郎、悦三、トミらを連れ、夕方提灯を持って拾いに行く。百人余りも行っているとのこと。聞けばこの度の時化で、アナマの漁場では掛けニシン百石も流失し大損害とのこと。実にとんだ災難で気の毒だ。

#### ▼四月二四日 (曇・寒風)

気分が良かったので五時起床、火を焚き板戸を開けていたら妻も起きて来た。毎日毎日の努力はたいしたもの、子供の世話、女中が居ないので二人分も働かねばならぬので、私も手助けせねばと思うが朝起きもなかなか大変だ。六時から七時までは子供ら四人の主なかないもの、足袋やシャツ、もも引きなどもコタツであぶってやるが、早く夏になつて単衣一枚で過ごすようになってくれればよい。八時頃浜へ出て見る、大時化の後で、の浜ではナマコや、寄ってきたゴモ (海藻) 拾いで七、八〇人も出ていて賑やかだ。海藻類は肥料分があるので畑作のこやしに申し分ない。私のところでも明日あ

たり拾うつもりだ。熊さん、今日も坂下と配網に行く。風で思わしくなかったそうだが正午ころ降り、カレを半モッコ貰う。三時頃浜へ出て見るとスケソ網大漁、沢江でも大漁とのこと。ニシンばかり当てにせずカレでもスケソグラでも獲れば、吉早はまだまだ左程悲観したものでもない。農村のように一年に一回の収穫からみれば大いに発展の余地があると思う。アサツキの初物を食べる。

#### ▼四月二五日 (晴)

今日も五時に起き、板戸を開け火を焚く。気分良ければ仕事した後の二飯もおいしく、愉快になるが、気分が悪ければ青い顔をして休み、食事もまずく、不愉快なところと上ない。気分良く活動して愉快に過ごしたいもの。それにはよくよせず、気を広く持ち仕事を楽しむことだ。時化後に昨晩あたりひと漁あるだろうと期待したのにさっぱり。これからだといよい見込みがないとあきらめ、納屋や網などの後始末をするところもあるとのこと。△、崎長などもキウリ糸を買いに来る。期待し

ていたニシン漁も未曾有の不漁で終わるのか、実に二カ年の不漁五万石不足、吉早としては百二、三〇万円の減収、影響は大きい。熊さんと吉治は浜からゴモやウロコなど車で四台も運んだ。肥料にするつもりだ。今年結果が良ければ、来年は沢山とるつもりだ。私は店番をしながら倉の片付けをする。夜、松尾老父の通夜に行く。帰りにシヨボシヨボ雨が降る。春雨の音を聞きながら奥のコタツで日記や、元帳への帖上げなど二一時頃までやる。春の風はいやだが春雨は心が落ち着き気持ちよい。

#### ▼四月二六日 (雨)

昨夜来春雨がシトシトと降り出し今日も止まぬ。雪も消える、鯉場もいよいよ終了。丸山岬や山中方面六、七か所建て込み、あとの歩方連は皆網を切り上げ支度中、今日も船囲いをしてる。春先の船出しの頃は、大漁すべく意気込

んで暑気も良かったが未曾有の不漁でがっかり、ひと春働いてもひとモツコか二モツコ、鯉漁も実に危険なものになった。むしろカレ、スケソノなど鯉漁にも力を入れて、鯉漁を副業にするぐらいが安全だ。一〇時松尾老父の葬式、老人会その他、見送りの盛大だった。・嫁さん、美国に候補あると目下話中とか。早く良縁がまとまればいいが。例年ならば今頃は忙しい時期なのに久では若者に落葉松切りやら材の始末をさせている。出足早(デタリヒラ)現在の白岩町(白岩)で六杯、八、種田で五杯くらゐ。実に記録破りの大不漁だ。

#### ▼四月二七日 (雨後晴)

起床五時、板戸を開け火を焚く。間もなく妻も起きる。気分の良い時は早く起きて活動しても大して大儀ではなく、むしろ愉快で朝食もおいしい。気分が悪い時は不愉快、大した違いだ。雨風が吹き海は時化、熊さんが来て鯉場も終わりなのでモツコ、その他鯉場道具を片付ける。ツラ一本一〇銭、サキリ一円で売ったこともあったが今は昔の夢になった。九時から信

用組合で農事実行組合の総会があり行く。五月十日に一人一〇円払い込み、後は代表者で低利で借り入れること。敷地建物に元土谷座、杉山の家を二六〇円で買い取ることに決めた。あの場所なら申し分ない。終わって二時半帰る。この頃から天気もだんだん快晴になる。午後から本へ火防監視のことで行く。一条、元町を廻る。古早川は雪解で大水が出ていて、漁場では広い河原に網を洗いに来ている。大滝大工さんのところで川に近いので早スイセンやチューリップが青々としていて、春が近づいている。三時帰る。あと水田を三反ほどこしらえるので松井さんへ相談に行く。

#### ▼四月二八日 (快晴)

五時におき板戸を開け火を焚く。熊さんも来てそれぞれ分担して朝の仕事をやる。六時過ぎまでは忙しい。今日は母の命日なので仏壇の支度をする。暖かい天気であの沢山あった雪も大抵は消え、裏の花畑も全消えた。今年は菊花と別にダリヤを作るつもりだ。鯉場も不漁で切り上げが近くなり、キ

ウリ糸などがよく売れる。歩方もこまごま、三日中には解散するとのこと。命日なので和尚さんが来られる。名古屋の実家に行かれ二四日に帰られたとのこと。いろいろと内地の話を聞く。午後から妻、吉治、トミらがアサツキ取りに農園へ行き、四時頃帰る。聞けばまだあちこちに雪があつて、アサツキもほんの少ししか取れなかったとのこと。勇丸が出帆するというので、岡崎へアサツキとカレを少々送る。幸治から久しぶりに手紙が来る。入学者は五組に分かれ、幸治は五組とのこと。片商からは二三名が合格したとのことだ。元気でいるのは何より喜ばしい。静かなよい夜、明日も晴天ならん、酒井さんではこれから水田五反歩起すというので、種もみ五斗(五反歩分) 松井さんへ依頼す。本年初めて米作をやるつもりだ。この頃はどこも水田をやるようになり支度に忙しいようだ。

#### ▼四月二九日 (寒風)

この頃は熊さんが朝早く来て手伝いをしてくれるので、朝の仕事は都合よい。店では鯉場の切り上

げで糸類の売れ行きがよい。朝食後、熊さんは裏の納屋ほこしやサキリの後片付けをやる。去年も今年も二シンは一尾も買わず、折角の納屋も無駄に終わった。泥の木方面から出て来て家を借り、子守や納屋まで用意して全く漁の無いところさえある、これもいたし方ないことだ。私はこの頃気分もよろしいので、朝も五時には起き一日中片付けや用を達している。病氣も無く健康で働けることは何より愉快なことである。午後二時頃、今年初めて農園へ行く。長吉さんのところを廻つたらもう畑を打っている。チューリップや水仙など二、三寸も出ている。昨秋作った水田三反歩のところは雪も消えて、地面が出ていて、今春耕付けをするのだ。寒風の中だがヒバリやうさぎの鳴き声も聞いた。畑には子供らが手籠を持ってアサツキ取りに来た。花畑も雪が消えた。去年立てた花の名前を書いた札が雪で倒れているので起す。桜の蕾はまだ固いうだ。五時帰る。遠山はまだ真っ白だが、近い山は雪がまだらだ。風が寒い。

## ▼四月三〇日 (ダシ風)

起床五時、熊さんも四時半から来て朝の支度をしている。子供らは六時半頃からソロソロ起きてくる。子供らもこの頃はだんだん暖かくなったので、衣類を着せるにも割合楽になった。早く単衣ものですむ気候になってほしい。海は上ナギ、歩方連は網の片付けをやるやら、船の囲いなどで忙しい。夜回りのじいさん、秋に切ったリングの木を薪にするのに今日から来る。四敷分を八円でやることにした。父は昨日辺りから元気になり、裏へ出ていろいろ仕事をしているが、五月、六月頃になればさらに良くなるだろう。二時頃からいやなダシ風が強く吹き始め砂塵を飛ばしている。こんな時に火事にでもなれば大変、火防巡視をするつもりのところ、五時頃から少し静かになったので見合わせた。先ずは安心した。今夜・歩方ではアゴ別れの祝宴で、踊りやら歌やらドンチャン騒ぎ、大漁してのアゴ別れなら愉快だろうが、今年のような漁では気の毒だ。月末なので目録を書く。

## ▼五月一日 (快晴)

祝聖会の例会日、四時に起きる。薄明かり、火を焚き顔を洗う、まだ水は冷たい。寺に着いたのは三番目、例の通り読経、六時から和尚の部屋で旅行談あり、土産に神木塗り箸と名物のアメを貰う。寺の玄関や中庭にはまだ雪が沢山あるが、裏の池はきれいに解け、ツバメが巣を作るのか来ている。帰ったのは七時。今日も書き出しを書き、熊さんが配達に出る。正午の船で佐渡から伊藤のおじさん、四十年ぶりで来られるというので妻が迎えに行く。支店に泊まることになった。今夜、警察署で来る十日、全道火災予防デーを行うにつき協議あるからと、本組長から連絡があり七時に行く。一四余名が警察署に集まりいろいろ協議し、一〇時帰る。今日から北海タイムスを止め、東京朝日新聞を購読することにした。

## ▼五月二日 (快晴)

朝のうちはミソレで寒かったが、一〇時頃からだんだんと晴れた。朝夕の寒いこと実に甚だしい。こ

の分だと各地の桜も遅れるだろう。熊さんは午前中は沖村方面へ目録配達に行く。例年五月だとまだ漁があるが、今年は早く切り上げたので、出稼ぎなどに出るのも早いようだ。午後から新地方方面に行く。この分だと一五、六日頃まで精々取り立てに廻らねばならぬ。聞けば今朝、余市ではニシン百余石、増毛では五千石、樺太一万石、とこのこと。今日午後にも樺太へ出稼ぎの漁夫やら、賄いなどで女連五、六〇名が行き、後からも続いて行くとのことだ。午後一時から火防組合役員会があり、信用組合に集まる。来る一〇日、宣伝デーのことについて協議す。二〇円の支出について承認を得た。本年の不漁につき予算更生、慰労費七〇円、警備費七〇円、合計一四〇円削減された。不漁はどこまでもたたる。五時ようやく帰る。夜、妻は支店の伊藤おじさんのところへ話に行く。

## ▼五月三日 (快晴)

朝夕は随分寒い。樺太は大漁とて出稼ぎに行く者が沢山いる。町は一日ごとに寂しくなる。余市で

はニシン百石もとれたという、古平でも今頃投網していれば取れたかも知れぬが、建網は余り早く揚網してしまつたという者もいる。天野さん、今日から農園の仕事に来て14号畑のリングの樹を切る。せつかく楽しみに植え付け一七、八年も過ぎた働き盛りの樹だが、病気で枯れるという不幸があった。今日も入船町の渡辺さんのサンパに漁夫二〇数名が乗り込み、リングの樹二〇敷余りを積み込んでいる。リングも一時は全盛の頃もあったが、今は水田、水田と騒ぐ世の中になった。一〇時頃、伊藤さんが来られいろいろ話し昼食を出す。後、父と・へ行く。熊さん、買いニシンを身欠にしたものを一本(ニシン製品をムシロで梱包する時の単位で、昭和初期での一本は身欠千本)二〇円で売れたという、上値だ。百円の元手で一ヶ月も経たぬ内に五、六〇円儲かるとは、これでは買いニシンは止められぬ。七時から役場で三〇数名が集まり、一〇日の火防デーのことについて協議する。一〇時半帰る。

(続く)

# ワラビタイ道路の沿革

## 「ワラビタイ」の地名

古平から積丹半島の尾根である岩内郡(共和町)との郡境に向けてワラビタイ道路が延びている。

古平川の源流に近い川に沿って道路があり、実際に道路を走った人の話では、ゆるい傾斜のある平坦地が広がっているという。地形図で見てもその様子がうかがわれる。

ワラビタイと言う地名は長万部町にもあり、JRの駅名にもなっているが、その語源については大よそ次のように言われている。

「ワラビタイ」ワルンベ・フル。

「蕨・板の意味」。蕨のことをアイヌ語でもワランビ・ワルン

ベと呼んでいて、日本語とよく似ているので、日本語伝来の言葉だったのでは? とも言われている。

増玉県に蕨市があるが、これについては調べたことがない。

「ワラビタイ」という地名は片仮

名・平仮名や漢字で表記されているが、漢字では「蕨岱」「蕨台」などがあり、国の機関で発行された古平町の地形図などでは「蕨台」となっているが、先の長万部町の駅名では昔のままの「蕨岱」となっている。

## 昔からの交通路

アイヌの人たちは、昔から六志内を経て古平郡(神恵内村)との郡境を通り泊村へ抜けていたが、また、旧稲倉石鉱山付近を通り、発足(岩内町)や茅沼(泊村)などの地域とも往來していたようである。

(二月の厳冬期に茅沼から古平まで、苦難の山越えの体験記「古平行の記」を次号で紹介)

金・銀鉱などの探鉱で一時は大いに賑わった旧稲倉石鉱山もその後休山となり、一時期休業していたが、昭和の初め頃から鉄興社が

マンガン鉱山として開発し、鉱石運搬のための道路として、昭和八年、稲倉石に至る途中のタモギタイ道路が約二、四km延長され、これが途中からワラビタイへ続く道路の改修につながった。

現在の道路図で見ると、発足からは発足川に沿って「蕨台古平線」が五kmほど延びており、泊村茅沼からは玉川に沿って、これも「茅沼鉱山泊線」が四km余り、いずれも二郡の郡境にまたがる岩平峠(高さ約八〇〇m)の方向に向かって伸びている。

これらの道路は昔からのけもの道が改修されたもののようであるが、その後の進行状況については分からない。だが道路図で見ると、これは「蕨台古平線」の最終地点から郡境を挟んで、直線距離でそれぞれ四、五kmの距離しかないところまで迫っているのが現状である。

## 岩内道路開削工事視察

昭和八年古平町会(町議会)事務報告から

「かねてから懸案となっていた古平・岩内間道路開削工事の問題に



1万分の1地形図によるが現在は途中から通行不能、道路はおおむね古平川の本流に沿って建設されている

ついで促進のため、三月十六日、町会議員や町役場吏員、有志らの一行九人を以って、本町より岩内に至る雪中十二里間の予備踏破を敢行し、超えて同月二十三、二十四日の両日に亘り、札幌土木事務所員、後志支庁員、岩内町会議員、それに本町吏員ら一行十四名により実地踏査の上詳細なる調査を行いたり。(以下略)

「本紙に連載している「高野名日記」から摘記

「(二月二十七日)：三月二十四日、岩内・古平間自動車道路視察のため岩内に向いた役場吏員らが、岩内よりスキーで山越え、二十五日帰ったという。」

この道路視察についての二つの記録では日程に一日のずれがあるが、日記は二十七日に書かれているので、一日のずれがあったとも考えられる。

このスキーで山越えをした踏査隊を含めて、関係者一同の写真が残っているのが、現在はずべてが故人となっているが、古平町内についてはゆかりの人も多いと思われるので、分かつている氏名について記名する。

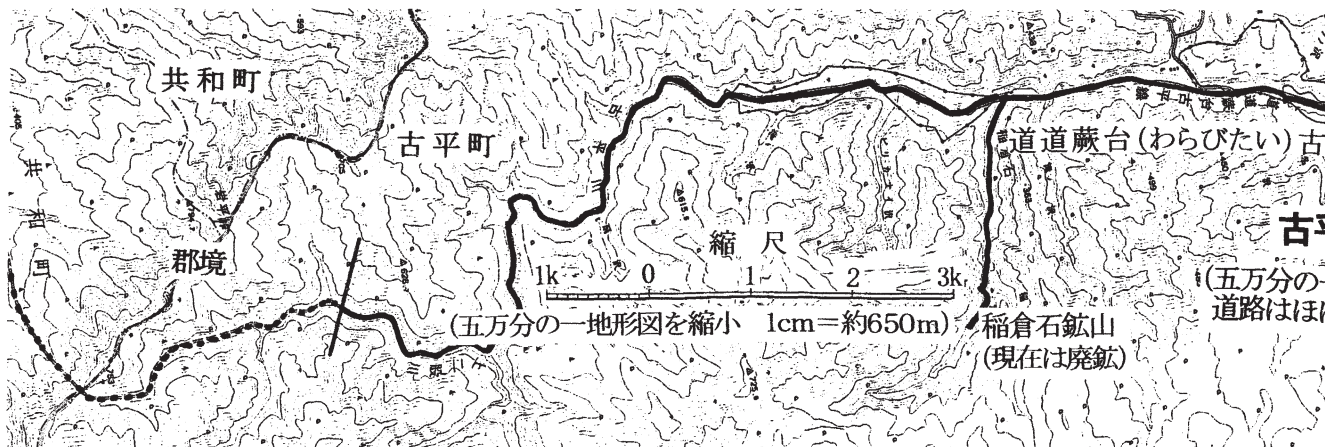


町長 武田 典(役場吏員) 北浜嘉雄、八反田弘、三浦銀治、武川清、高見勝太郎、大沢徹、福井敏雄(町議・町有志) 八反田幸太郎、高野勇次郎、本間愛三、梅野富蔵、田中吉太郎、外内幸八、松岡秀雄



↑岩内町へ向かう調査隊一行(古平町役場前)←改修されたワラビタイ道路(4号橋付近)

斎藤兼太郎、田沢良吉、藤田秀雄、平田千代吉、山崎清治(前列 写真向かって右から、札幌土現白浜技手、同清水技手、同高田班長、古平町長武田典、後志支庁課長、同課員、他は不詳)



青一色の絵の具を流したようなこの朝空！

思わず大声をあげたくなるような思いにかられ、サンダルをつつかけ庭面に降り立つ……と、餌を欲る小雀たちが一斉に飛び来て、ほころび初めたライラックの花びらを揺すり小枝に止まる。

梅木うつぎに支えられ、今年もひそやかにほころび初めた紫のライラックの小花。

想い出はいつも、初夏の頃になると悲しく思い出すのだった。

その頃、永年の教員生活を終えた父は、母と札幌の住宅街の一角にひっそりと居を構えていたのだった。古平町のひととなっていた娘の私に、札幌の香を忘れぬようにと思ったのであろうか、父は裏庭に生い茂るライラックの幼な木をあき箱に収め、沢江町のわが家まで送ってくれたのだった。父の想いに涙しつつ汐風のあたらしめように……と、庭の片隅に丹念に植えたはずだったが……、海風汐風により伸びもせず、花咲くこともなく、いつか私の思いから忘れ去っていったのであろうか、あれから数十年後……

私共は再び札幌の地を踏むこと

になったのだ。荷を積む大きな引越シトラックの荷台の片隅に、花咲くことも伸びることもなかった幼な木を、忘れ去ることもなく積んで来た。そして札幌のわが新家の庭の片隅に生う梅木うつぎの片へに丁寧に植えたのだった。

だが汐風がしみこんでしまったのが花咲くこともなく幾年が過ぎ、いつか忘れ去っていった年月はなが

## 葉書文学とは……

大 澤 文 子

かり、可憐な紫の花房を見せてくれるのだった。

辞典をめくるのが好きな私は今宵ふと勉強したいと思い、本棚の片隅からまた大好きな水原秋櫻子の『季語集』を繰っていた。

「リラ、ライラック」と言われている花は『紫淡の筒状の細い花で香気がつよい』『日本名は『紫はしどい』とも言われているとあった」

私は今……現在咲きほらっている小庭のライラックに触れながら、いつの日か読んだことのある一詩人の一節を何故か切なく思い出していた。

○未来はためらいつつちかづき

○現在は矢のように飛び去り

○過去は永久に静かに立っている

……と

うーん……何故か分かるような気

もするがこの夜ははわけもなく淋しく、ふと「エリーゼ」の楽譜をめくり口ずさんでいた……

と、けたたましく電話のベルが……、気をとり直しあわてて受話器をとる。

「遊びにいつでもいい？ 分からないところがあるから教えてネ」

歌友の声だ。なにかしらホッと心が安らぐ思い……

「待っているよー、だけどこの頃、いろいろあるからネエ、マスクもつて来るといいよ」と、注意した。

その時、ふとある文学者の書かれた一文を感激して読んだことを思い出した。

——ハガキについて——

「葉書文学」とでも言える、それはそれなりに味わいの出てくるもので楽しいものである……と。

時間がないよ……と言う人です

え、はがきなら七、八分で書けるはず、はがきを書く楽しさをもてほしい……と。

はがきの片隅に、色鉛筆で好みのお花はなを色々書いて送って下さるおひとの小さな心づかいに拍手をおおくりしたい……。

本州地区稲倉石会

# 雲海の箱根に集う

富山市 高橋 藤蔵  
(元・稲倉石鉱業所勤務)

今年の稲倉石会が、五月二十八・九の両日、箱根で開かれまして。

この会は、かつて沢江村の山奥にあったマンガン鉱山で働いていた鉱山マンが、今なお友情の絆を強情なまでに持ち続けているグループです。

鉱山を離れて四十年。若かった鉱山技師も、今は平均年齢が七十五才、最年少で六十四才という超シルバー族です。

今回は、第一日目に、ゴルフ組と観光組に分かれ、ゴルフ組は、名門「芦ノ湖カントリークラブ」で、秀峰富士山に向かっての豪快なショットを満喫し、観光組は、富士山を展望しながら箱根の名所を駆けめぐり、夜

は仙石原の豪華な「ホテルグリーンプラザ箱根」で合流し、和気あいあいの大宴会。

第二日目は、全員で大涌谷などを観光し、小田原で解散という計画でした。

ところが、ところがです。

東京を出発する時は曇りだったのですが、箱根湯本に着いた時には豪風雨となり、早々にハウスに到着し、天候の回復を待っていたゴルフ組は、ドシャ降りの雨と横なぐりの風で、止むなく中止し、宿泊ホテルに引き揚げ、ヤケビール・麻雀・囲碁などで時間をつぶし、かたや、観光組は、飛ばされそうな強風でロープウエーは終日運転休止となり、期待していた観光も、

見えるのは、車窓をたたく大粒の雨だけという悪天候で、一步も外へ出られず、宿泊ホテルに直行。

ゴルフと観光が中止となり、早々にホテルで合流した参加者は、悔しさタラタラかと思いきや「歓談と飲む時間が多くなつた」とばかりに、本番前の『迎え酒宴会』で盛り上がり、その余韻も覚めないままに、夕刻六時から、お待ちかねの『大宴会』となりました。

昭和四十年頃の社宅街



美味しい料理を快食し、飲み放題の酒・ビール・焼酎を快飲しながらの話題は、いつも飽かずに、鉱山時代の思い出と同僚の安否などで、飲むほどに食うほどに話の種は尽きず、部屋に戻ってから車座になったの即興の二次会で賑い、かつての鉱山の兵どもの豪遊が深更まで続きました。かくして、暴風雨を子守歌に眠りについたのは、どなたも午前様でした。

さて、期待していた二日目も豪風雨は止まず、予定していた観光を中止し、小田原での『さよなら昼食会』の後、解散となりました。

思えば、幹事さんが緻密につくってくれた、いたれり・尽せりの計画も悪天候に遮られ、託送したゴルフ用具を荷解きもせずに自宅に転送し、観光すべき富士山とも会えずの集いとなつてしまいました。皆さんとの再会に大満足し、来年の稲倉石会を小樽周辺で開く事の楽しみを抱き、幹事さんに感謝しながら、遠路、日向・一ノ関・山形・富山へと家路につきました。

# お祭り二題

その時の写真もあるはず……  
 と言って、横川  
 さんが見せて  
 くれたのが二  
 枚の写真であ  
 った。

古平の夏は琴平神社のお祭りでは幕開けしたと言ってもいい。町を挙げての一大行事であった。よく賑やかなことを「盆と正月がいつぱんに来た」というが、お祭りには独特な雰囲気がある。戦前は神社にも格があり、琴平神社は「郷社」として地方の総鎮守であった。

漁村は早くから開けたところが多いので、神社もそれによって創設され、漁業を中心とした生活の中にその信仰は深く根付いていた。それだけにお祭りは、宗教というより生活の一環として、町民の中に息づいていたといつてよい。

## 小樽さくらまつりに 港町の山車が出演

お祭りも近い頃、港町の横川自転車店に寄って雑談の中で、「以前港町の山車が小樽のお祭りに借りられて行ったことがあって、確か



山車に飾っている人形は見慣れた恵比須・大黒さんの二体であり、後ろには「観光ふるびら」の文字も見える。メモには「小樽さくらまつり」とあり、期日は書かれていないが、横川さんの記憶では「確か昭和四十年頃だったように思う」とのこと。

珍しいのは山車を引いているのが馬であること、当時はまだ近距離の輸送には馬が利用されていたし、古平でもスケソの漁期には馬

そりが港周辺で大活躍をしていた時代である。

## 天狗の「火渡り」か 「火くぐり」か

古平でのお祭りのハイライトは何と言っても「天狗さんの火くぐり」だと言ってもいいでしょう。

神社の神事としての儀式であるお祭りでは「天狗の火渡り」と言われているが、古平の人たちの間では昔から「天狗の火くぐり」と言い慣らされている。

「渡り」という言葉は「…渡り」と言えば、それは「行ったり来たりすることの尊敬語」であるから、町内を巡行される神様の場合は当然「渡り」という言葉を使うが、火渡りの現場を見ると「火くぐり」の表現のほうがピッタリする。

以前は火を焚くのに「かんなくず」が使われたが、今はどこの建設現場へ行ってもかんなくずはほとんど無い。天狗さんがいざ火の中に入ろうとするその前に、抱きかかえるほどのかんなくずを火の中に入れて、一瞬、炎は天高く舞い上がり、その時を逃さず天狗さんが火中に突き進む。と、火は



さらに周囲にも舞い上がり、天狗さんが身の丈を超える火中から現れるという情景は、まさに演出効果も満点で、取り巻いた大勢の観客からは一斉に歓声が沸きあがる。これを見る限りではやはり「天狗さんの火くぐり」である。

琴平神社が新地町の国道側にあった頃、その向かいに田口さんという屋根屋（桝屋）さんがあって、そこのおじいさんが一年かけて沢山のかんなくずを集め、燃えやすい屋根の桝（まさ）木をうすく割って屋根を葺いた」などを用意しておいてこの神事に備えていた。してみると、このおじいさんこそ「天狗の火くぐり」の真の演出者であったのかも知れない。

# 祝 札幌古平会70周年記念

## 記念誌の発刊を祝う

今年のはじめ頃か、教育委員会の金沢次長から「今年、札幌古平会で記念誌を発行することになったので、町史編さん室の方に何か資料が無いかと聞かれた」という話があった。

記念誌を作るというのは、これまでの経過を記録として伝えるだけではなく、会としてのいつそうの結束を強めることにもなり、今後の更なる活動が期待されるだけにまことに有意義な事業だと思っただが、さてその資料となると？特に札幌古平会としての資料となると全く所蔵していない。今までも札幌古平会のあったことを新聞紙上で知り、後で出席した人から、同郷の人たちの和気藹々とした熱気のおふれる集まりであったこと、また個人の消息を聞くぐらいで、記念誌に載せる資料というような

ものは持っていなかった。

それで「札幌古平会についての資料は全然無いネー」というような返事をしていただいた。「もし、古平

札幌古平会70周年記念誌

望 郷

平成21年5月  
札幌古平会

### 札幌古平会70周年記念誌『望郷』

本にもなるような出来ばえ」というような記事が出て、記念誌の出したことを知り、ぜひ拝見したいものと期待していた。

それから間もなく、記念誌の編集委員長である相良孝一さんから記念誌が送られて来た。

表紙には『望郷』のタイトルが飾られ、照り映えた汪洋たる（古平の）海が広がり、見開きには古平町の航空写真と、一穂の「ふるさとの礎」の写真があった。

記念誌ということなので、今はすぐそこ？ でも、昔は遙か遠い街……。そんなことで、遠い札幌に住んでの思い、新しい環境での生活には寂しさや苦難もあったであろう。そしてそれらを乗り越えて、今の厳しい中でも、落ち着いた心豊かな生活の一端などが語られるかと想像していたが、以外にも懐かしい古平での思い出で、そこにはタイトルにある文字通りの『望郷』の思いがこめられていた。

本文を開くと、古平町内の人は別としても、そのほとんどは見慣れた名前であり、お名前を見てかつての姿が思い浮かんでくるような思いに駆られるが拝見した。

そして、それぞれの感懐を込めて寄せられた一文を読み、故郷を離れ今では異郷の地と呼ぶには大げさだが、札幌に生きる方々の故郷への思いがひしひしと迫ってくるのを感じられた。

百人一首にもあり、日本人に愛誦されている、安倍仲麿の歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」は、日本人の心情を代弁しているのかも知れない。札幌の円山を見ても、きつと古平の丸山のことを思い出していたのでしよう。

なお、本文にもある古平の懐かしい思い出の写真を見て、このような写真が必要なのであれば当然でも用立てられたのにと、後になつて「ゴマメの歯ざしり」ではないが、思い至らなかったことを悔やんでいる。

札幌古平会の活動を願いながら発刊をお祝いします。

町に関連する資料でも必要なときは言ってくれば……と伝えた。

それから数ヶ月ほどして、道新に「札幌古平会で記念誌を発行、古平町民にとっても古平町の副読

短歌

古平町岬短歌会

夢に來し友の笑顔を偲びをり除夜のテレビの鐘の音侘びし

池田 テル

重たげななまり色なす冬の空窓辺で微笑むベコニヤの花

金子 信子

柔らかな光りのそそぐ春の朝さくらの木の芽膨らみはじむ

坂本 信子

鉢花の蕾ふくらむ春やよひ吹雪まがひの空も明るく

鈴木 木時子

花愛でる心うすらぐこの日頃歌友(とも)くだされし雛の花籠

田中 香苗

母べえに映し出されし敗戦の頃を知り得て若きら涙す

玉谷 美都子

うすら陽の中を風花流れ行く地表に届くをしばし見てをり

丹後 初江

腰痛もやはらぎてきぬ太極拳続けてゆかむ体力アップに

寺田 カツ子

寒き日の窓に映れり裸木をカラスら突つく春まだ浅し

仲谷 喜美能

ひき潮が砂を曳き去る波の音浜の形を年ごと変へゆく

堀 典子

俳句

古平俳句会

波音の凍て星の凍て影凍つる 越野清治

裏山は鴉のねぐら大冬木 斉藤波留

雪掻きも仕事の一つ今日三度 山口悦子

寒月に鳥光りつつ川を越え 越野敏雄

師走來て老いの心も揺れ動き 大和田絵伊

吹き惑ふ風に香れし冬そうび 高橋重子

大空の星を仰ぎて凍る顔 堀 典子

初明り波を揃へて迎へけり 渡辺嘉之

日もすがら漁火揺るる雪の朝 室谷弘子

日の昇り生活新たに年明くる 仲谷比呂古





雜詠 〔三月号〕  
主宰 水見壽男

荒海に揉まれし寒の鰯の艶 越野 清治

船倉や雲影を曳き冬の月

荒海や今が旬なる助宗漁

菩提寺の庭に雲影笹鳴けり

冬晴の続かず時化の続きをり

絢爛と錦織りなす紅葉山

露天湯にまた一枚の散もみじ

ものぐさの男いそいそ落葉焚

小夜更けて窓に初霜見たるかな

冬の朝社の太鼓志気高し

冬日のせ出漁の船かもめ追ふ

大白鳥空暗くして湖に入る

黒雲の去りて耀ふ冬日和

〔句并〕

山口 悦子

越野 敏雄

雲一つ無き青空や霜しづく 高橋 重子

波音の夜をゆさぶる冬の雨

暮れかかる夜空の道を冬の鳥

霜柱踏みし足跡ふり返る

冬晴れて風優しくて波静か

静かなり古寺を訪ねる冬のたび

老二人心静かに除夜の鐘

冬の波捲れば碧き海の色

冬の波鳴の埒奪ひけり

灯台の明かり散りぢり冬の波

海峡の風継ぎ足して冬の波

時化早やくなりし岬や冬の海

日本海冬の怖さを仄めかす

冬海に馴染みし手足網たぐる

冬の手不気味なまでの黒さかな

〔句并〕

外山 俊久

渡辺 嘉之

室谷 弘子

# 怒濤

【四四】

— 三月号 —

## 古 平 俳 句 会

岬山をふわつと翔ちし初鵲 越野清治

初春を謳歌してゐる鴈かな

かんじきの一步一步の深雪かな 山口悦子

山里の軒にかんじき雪深し

雑煮餅白き雲より柔らかし 越野敏雄

雪深し羊蹄山かぶり露天風呂

日々過ぐす早さのありて冬至かな 大和田絵伊

け嵐に冬日上りし海の綺羅

身あたりに風花舞ひし夕明り 高橋重子

鳥の群横ぎる冬の日向かな

星満る冬の夜星の宴かな 堀 典子

厳冬や頬にびしびし大気触る

悴んでつひつひ背も丸くなり 渡辺嘉之

浜風を背で受けてる凍てし朝

漁師らの五感揺さぶる寒の雨 室谷弘子

真夜中の岬に靡きし寒の雨

対岸を呑み込んでゐる冬の朝 仲谷比呂古

風唸り破濤の唸り冬ざるる

# 私の一音

三月詠草

排気音高まる自動車買ひ換へて六十半ばの男元気に

泉 清 三

通勤にドライブに様々な用事にと、十五万キロ以上も走ってくれた愛車、疲れきった車体を休めて又新しく産れて来てと願い、買い換えた。音も静かに走る新車に自分も若返った気持ちで、又頑張ろうと思う。

## 編集後記

▽行楽の季節になると観光だけではなく、自分の仕事や趣味に結びつくものを求めて訪れる人も多くなります。古平町には恵まれた季節の景観と共に、歴史的なものや、文学碑のようなひとつの文化財と言えらるるまで散在しています。

ここ何年か、畫家の間では吉田一穂の詩が作品の題材になることが多いようで、毎年何人かの方や団体が訪れております。

一昨年から、兵庫県有馬温泉に

在住の方が毎年来られ、今年春の毎日書道展に入賞されたというお知らせもあり喜んでおります。今年の連休明けには、東京で書道塾を経営されている方が来られ、一穂の詩碑を丹念にご覧になっておりました。その節、習作としての作品を三点点いただきましたが、今夏札幌で個展を開く予定とも聞いております。

▽昨年引き続き、今度はH T Bテレビ局関係のスタッフが来られて、今では「古平名物」と喧伝されている《花だんご》の取材が行われ、去る一四日に全道放送されました。

火が消えず  
おれおれは  
吹雪の中に  
生地

一穂の詩より  
想うと

一穂の詩より〔習作〕

た。本間禮子さん（入船町）・渡辺しずえさん（本町）・上田由喜さん（丸山町）らが、鮮やかな慣れた手並みで実演してくれました。昨年は道新にも同じメンバーで紹介されましたが、町広報にも掲載されました。話題が広がったように思います。その後、泥の木の佐藤一郎さん、浜町の大和田さん宅にもおじゃまして、その地域や家庭での利用の様子をお聞きして、「せたかむい」でも二回ほどお知らせしたことがあります。葬祭から、忙しい時期には日常の常備食ともなり、郷土の特色ある葬祭などのお供えものとして、また、楽しめるおやつとしてぜひ伝えたいものです。



花だんご 2種

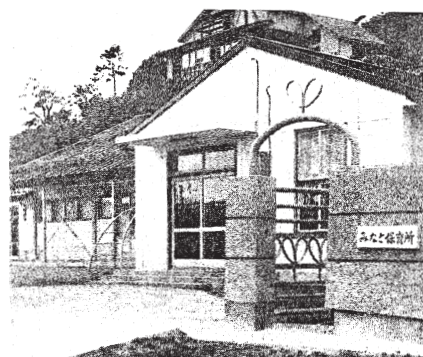
▽港を見ると久し振りに漁船で賑わっていて、本州船籍の船も目につきました。古平沖も夏イカのシーズンを迎えたのです。道理で水平線には漁り火が輝いていました。古平港の水産物の水揚げを見ると、昭和に入ってからにはイカ漁が常に上位を占めていて、かつてのニシンやスケソ漁に次いで古平の漁業を支えてきたのです。季節の味覚、生きのいい朝イカが食膳にのぼるのも浜ならではの幸せかも知れません。

▽この暑い七月に三月号とはちょっと間延びしていますが、季節に追いつけ、追い越せ？ で精々ががんばりたいと思っております。引き続きどうぞ愛読ください。

# 古平町史年表

昭和 4 2 年 (1967) ~ 続く

- 4/1 : 古平町立みなと保育所が開所する
- 4/7 : オリユートル沖出漁鯨船団壮行式が中央埠頭で古平漁業協同組合の主催で行われる
- 4/10 : オリユートル沖出漁の第 1 船団が出航, 続いて 4/12, 第 2 船団が家族や関係者らの盛大な見送りを受けて出航する
- 4/15 : 統一選挙は始めに第 6 回知事選挙, 道議会議員選挙が行われ, 知事選では現職の町村金五が革新の塚田庄平を破り 3 選される
- 4/28 : 続いて古平町議会議員の選挙が行われ, 定員 22 名に対し 24 名が立候補する。  
投票率 85.34% で, 町内 6 投票所のうち最高が第 6 投票所 (畑方面) の 93.89%, 最低は第 2 投票所 (新地町方面) の 82.59% であった
- 4/ー : スケソの漁獲高が前年度比 29.7% の増加, これは 4 月まで操業したこととニシン漁へ出漁の漁船がスケソ刺網に従事したことなどによる
- 6/13 : 町では水道の現況を正しく理解してもらうため, かねて見学希望のあった新生婦人会・沢江婦人会・双葉婦人会員の上水道見学会を行う
- 6/16 : 昨年に続き畜産振興奨励事業の一環として, 第 2 回古平町家畜共進会が旧古平小学校跡地で開かれ, 昨年以上の参加があった。  
各部の第一位 肉牛 沢口利雄・仔牛 上野孝・豚 児玉梅輔・馬 小野政吉
- 6/21 : 昨年に引き続いて, 琵琶湖産のアユ稚魚五万尾を古平川に放流する
- 6/ー : 古平町出身の元北海高校野球部監督飛沢栄三が死去する
- 7/5 : 港町野村甚作が, 養殖池でアユ五千尾の飼育に成功する。養殖池でのアユの飼育は極めて珍しい事例である



↑ 港町高台に建つみなと保育所



↑ スケソの大漁に浜も活気づく



↑ 最初に建設された上水道施設



↑ 家庭でくつろぐ飛沢栄三監督